インタビュー

『ダンシング・ガール』
振付：ゴーヤル・スジャータ

ダンシング・ドールの向こうへ

インド系コンテンポラリー・アーティストのスジャータ・ゴーヤルが、文化的パフォーマンス、アイデンティティ、エキゾティシズムの問題を探る

私たちにはまず、ある身体の部位――おそらく腕――が三角形に曲がるのが見える、そしてそれ以外は暗闇である。ライトが消える。パフォーマーが動き、身体の他の部位が照らされる。パフォーマンスがぼんやりとした状態から鮮明な状態に変わると、スジャータ・ゴーヤルは同じパターンで動き続け、スポットライトがまるでこの踊る身体の可能性を切り開くかのように舞台全体を覆うまで、ポーズからポーズへと変化を見せる。
『ダンシング・ガール』は、チュラロンコン大学芸術学部主催によるバンコクでの 9 日間のイベント「私たちのルーツの今――タイ／ ASEAN 現代演劇研究フォーラム・フェスティバル」において上演された。「私たちのルーツの今」――先週終了した――では、地域のベテランや新進のアーティスト、カンパニーによるパフォーマンス、学術フォーラムやラウンドテーブル・ディスカッション、ビジティングアーティストによるワークショップが行われた。
フェスティバルの名前から、エキゾティックな作品の奇抜なショーになるだろうと思った人もいたかもしれないが、様々な種類の文化的なパフォーマンスを含む一方で、文化的パフォーマンス、アイデンティティ、エキゾティシズムの問題に鋭い目を向けるイベントでもあった。
ゴーヤルは、インドとアメリカを拠点に活動するダンサーである。本フェスティバルにおいて、彼女はエキゾティックな作品を取り上げ、それを問題化するようなコンテンポラリーダンス作品を創造するワークショップも行った。彼女のソロ作品『ダンシング・ガール』は、2011 年にインド・チェンナイのアリアンス・フランセーズで初演された。本インタビューで彼女は、バラタナーティアムが記憶となったいきさつ、インドのコンテンポラリーダンス、ステレオタイプやエスニシティの商品化に抗うことなどについて語ってくれている。

いつ、どうしてダンスに興味を持つようになったのですか？

4 歳くらいの頃にダンスに興味を持ちました。私は人生の半分をアメリカで過ごし、インド系コミュニティの中でダンスを始めました。ダンスは私自身を文化に親しませる手段であり、両親が私をダンスのクラスに入れたのです。そのようにして、伝統的なインドの舞踊から始まりました。

コンテンポラリーダンスへの進出について教えてください。

南インドの伝統舞踊バラタナーティアムのトレーニングを約 20 年間しました。その頃までにはインドに移っていたのです。自分がしていたタイプの生活と、守っていた伝統的な習慣との間に強い断絶を感じるという段階に来ました。またアーティストとして、アイデンティティに関してや、新たな表現の形を創造すること、既存の思考の形あるいはダンスの見方を批評することなどについて、あまりにも多くの問いがあると感じました。そして、古典舞

踊界は保守的すぎるために、そうした問いを知的に、あるいは実践的に突き詰める場所がないと感じたのです。それで、インドでコンテンポラリーやモダンな動きの形、ダンスを探し始めたというわけです。その頃、自分の作品を創り始める前に何年間も共同作業することとなった、コンテンポラリーの振付家パドミニー・チットール［日本では「パドミニ・チェター」という表記が一般的だが、ヒンディー語の発音ではこのようになる］と出会いました。

新たなダンスの形式にどういったものを見出したのでしょうか？

伝統的、真正 (オーセンティック)、あるいはエキゾティックな作品の範疇に留まらない形で、インドのダンスを見る可能性があるということに気づきました。この振付家と一緒に創っていた作品は、非常にパーソナルかつ主観的な方法――即興やスローな動きを多く用い、様々な動き方を探究し、空間と時間を考察し、そして実験してみる――によって、身体へと戻るものでした。

そのプロセスを経験する中で、古典舞踊のトレーニングを止めたいと思いましたか？

二つの異なる世界が生じたことで、そうする決断をしなければならなくなりました。1、2 年ほどの間は両方のトレーニングを別々に行っていたのですが、とても引き裂かれるような感じがし始めて、私の立場 (ポリティクス) はさらにコンテンポラリーの領域に寄りました。それで、バラタナーティアムのトレーニングを定期的に行うのを止めることを決め、ダンサーとして立場的にも身体的にもコンテンポラリーダンスにコミットしています。

これらの二つの世界とどのように関わっているのでしょうか？

ダンサーとして、私は様々な形でトレーニングしてきました。そのため、今では伝統的な型は参照するものに過ぎなくなりました。私が身体の中に持っているひとつの文法になったのです。私は確かに、そこから多くの知識を得ました。それは実際に私が時間と空間を理解する基礎となっていますが、今では記憶――常にそこにある、身体の奥深い鍛錬――として私の中に保たれています。でも、もはやその通りの型を用いて作業する必要性や願望があるわけではなくなっています。

インドのコンテンポラリーダンスをどのように定義しますか？

インドのコンテンポラリーダンスのムーヴメントはまだ新しいと思います。しっかりとしたコンテンポラリーダンスのコミュニティや環境を形成しようという考えは、まだその骨格を見出そうとしている最中です。経済的な観点から言えば、インドではコンテンポラリーダンスに費やされるお金は限られています。でも、インドには確かに独自の美学を持ったコンテンポラリーダンスのムーヴメントが起こってきていると思いますし、それは次第に強い発言権を得るようになってきています。

インドにおけるコンテンポラリーダンスの定義のされ方に、問題を感じていますか？

これは今まさに様々な意味を裏に秘めた話題だと思いますが、インドで私の目につく問題のひとつに、コンテンポラリー界が西洋との関わりの中で、ダンスに対するこうした非常に野心的なパースペクティヴや態度を保っているように見えるということがあり、私はそういった考え方には実にうんざりしています。多くのフュージョンが起こっている状況は見られますが、ダンスを研究的なパースペクティヴから見るだけであれば、知的なプロセスが 5 分もすれば終わってしまうとも思うのです。マーサ・グレアムのような動きをし、作品の最後にムドラー（シンボリックな手／指の動き）を入れることはできても、そこには何もありません。しかしアジアでは多分に、商品としてのエスニシティという問題を常に扱わなければなりません。もちろん、アジアも自身の存在は非常に意識しており、シニカルで、自分なりにその問題に鋭い目を向けていますが、アーティストとしてその種のレンズやラベルを扱う際には、それについて自覚していなければならないと思うのです。そして私には、インドから出てきているそうした作品に、この意識が十分に生じているようには見えません。人々は自分たちがエスニックな商品であることに楽

天的過ぎます。何らかの批評がなければならないと思うのですが、十分に存在しているようには見えませんね。

世界中で旅をし、仕事をし、学ぶ中で、人々があなたに「インドのダンサー」であることを期待していると思いますか？

ある程度まではそう思います。伝統舞踊のダンサーとして、ローカルな文脈あるいはローカルな観客の外で対話を始めると、エキゾティックで古びていて、伝統的だという見方しかされません。その他の参照枠がないのです。パッケージ化されていますね。インドの伝統的な舞踊産業はいまだにそうした商品を輸出していますが、私がコンテンポラリーダンス――ある意味ではもっと進んでいると思っていたのですが――の世界に入った時でさえも、自分にかけられている期待――それほどあからさまな形ではなかったかもしれませんが、それは隠れたメッセージでした――を感じたものです。我々にとって分かりやすい枠の中に留まっているのであれば、お前を理解しよう。あるいは、コンテンポラリーのパフォーマーなら古典舞踊をやる必要はないが、インドにまつわることであれば我々に分かりやすい作品をやれ、というメッセージです。

『ダンシング・ガール』ではどのようなアイデンティティの問題を探っているのでしょうか？

私にとって、この作品はこういった政治的問題 (ポリティクス) への最終的な応答です。こうしたあらゆるアイデンティティの問題点――アイデンティティ、東洋、西洋の問題――に対するコメントとなっています。私は自分のキャリアにおいてソロ作品を創りたいと思う段階にあり、過去何年もの間行ってきた多くのリサーチに基づいて、ひとつの動きの言語を確立しようと懸命になっていました。でも別のレヴェルでは、エキゾティックな作品やアイデンティティといった政治的問題に意見したいとも思いました。そういうわけで、作品ではたくさんのシニフィアンや、インドの古典舞踊のダンサーのステレオタイプ、踊る人形 (ダンシング・ドール) を遊んでいます。それはまた、人がダンサーとして持つ孤独、そして疎外の感覚でもあります。ダンサーというのは、自己イメージの概念や、媒体の主観ー客観という性質と絶えず闘っています。ゆえに、作品は鏡に映ったこうした自己の表象の向こうへと進もうとするものとなっているのです。

どういったものを「ルーツ」だと定義しますか？アーティストとして、ルーツについて考えますか？

ルーツについては、それが私自身に大いに投影されているという事実との関わりの中で考えています。ルーツ、伝統、真正性といった考え方は、アートを見る上で非常にモダニスト的で白黒のはっきりした枠組み (パラダイム) だと思います――つまり、伝統対モダニティ、あるいはルーツ対現在といった具合です。私は必ずしもそうしたものにとらわれているわけではないと思っています。しかし、西洋で生活や仕事をしてはきたものの、明らかに西洋の外側にもいるということによって、非常に異なったリアリティや不安定さがアジア的な文脈の中で生じていると言わねばなりません。伝統とモダニティが融合してきた道のり、あるいは私たちが生きている時代にそれらが融合していく道のりは、西洋においてとは非常に異なったルートを取っています。その意味では、私はそうしたモダニティとのつながりを感じていますし、おそらくそれがルーツという感覚なのでしょう。

インタビュー、執筆：アミター・アムラナンド
翻訳：栗田知宏

『バンコク・ポスト』2013 年 7 月 7 日発行
【転載元：http://www.bangkokpost.com/print/334706/】